様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３９８７

研究課題名（和文）子どもの「意味構成」の質的発展モデルの開発

研究課題名（英文）Development of qualitative development model of children's "construction of sense"

研究代表者
樋口　裕介（Higuchi, Yusuke）

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：８０５８７６５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：第一に、三つの水準に即した授業の特性が、それぞれ第一水準：教科志向と再生産、第二水準：生徒志向と再組織／転移、第三水準：生徒、教材、問題解決を志向して教師の支配を取り外すこと、ととらえられることを明らかにした。
第二に、第一水準よりも第二水準、第二水準よりも第三水準の授業にあがっていく方が、子どもの参加が高まる傾向にあるとは言えるが、必ずしも子どもが自身の自律性の領域を際限なく広げていこうとするわけではないことも明らかになった。
第三に、意味構成、参加、学びの深さと関連した授業の水準のモデルを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　学術的意義は、以下のとおり、２点ある。
・これまで日本の初等教育においてもその重要性が自覚されていたものの授業論のなかに明確に位置づけられてこなかった「意味」という概念を授業づくりの原理として位置づけていること。
・ドイツにおいて主に中等教育での理解されてきた理論を初等教育の文脈で再解釈すること。

研究成果の概要（英文）：First of all, it was clarified that the characteristics of the lessons according to the three levels can be understood as follows.1st level: subject-oriented and reproduction, 2nd level: student-oriented and reorganization/transposition, 3rd level: students-oriented, teaching materials-oriented, problem-solving-oriented and removing the control of teachers.
Secondly, the participation of children tends to increase as they go to the second level lessons than the first level and the third level lessons than the second level.However, it became clear that children do not always try to expand their autonomy endlessly.
Thirdly, I showed a model of the level of the lesson related to construction of sense, participation and depth of learning.

研究分野：教育方法学

キーワード：意味構成　教授学　陶冶履歴（Bildungsgang）　参加

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

研究開始当初の背景は以下の通りである。

（１）社会の要求と子どもの要求の調和をはかるカリキュラム・授業構想のオルタナティブの必要

近年の教育政策において、次代を担う人材に必要な資質・能力を見定め、それをいかに子どもに育成するかという社会的要求の実現に重点を置いた舵取りがされている。そうしたなかで、社会的要求の実現を過度に重視することに対して、子どもの要求の実現という立場から再考の余地があることが指摘されている。例えば、コンピテンシー志向に向けられる批判（安彦 2014）や、スタンダードとアカウンタビリティにもとづくエビデンス・ベースの教育に対する批判（中野 2014）などがある。PISA ショック後のドイツの動向をふまえてのものもある（久田 2013）。いずれの場合も、子どもの人格形成を見すえると、コンピテンシーの形成のみでは、そして、その形成を示すエビデンスのみにもとづいて教育施策を運用することのみでは、子どもの確かな育ちを保証できないということを訴えている。

しかし、上述の論考においては、コンピテンシー・ベースやエビデンス・ベースの限界を指摘しているが、授業構想レベルにまで踏み込んだオルタナティブを提示していない。オルタナティブを提示するために、本研究において着目する概念が授業における子どもの「意味構成」である。日本の教育実践や授業論に目を向けると、教材の世界を子どもにとっての「意味」から検討し合う実践が数多く蓄積・研究されている。例えば、「ごんぎつね」を「つまらない」と言う子どもの読みを取り上げて子どもそれぞれの物語の交流を組織した実践において、子どもにとっての「意味」の重要性が指摘されている（例えば、鈴木 2005）。しかし、子どもにとっての「意味」は、その重要性が指摘されながらも、授業論のなかに明確に位置づけられてこなかった。

（２）子どもの「意味構成」に着目する「陶冶履歴」研究の、初等教育への援用

本研究で、手がかりとする「陶冶履歴（Bildungsgang）」研究は、上述のようなオルタナティブを提示しうるカリキュラム・授業構想である。子どもにとっての「意味」を追究した授業モデルが提示される。すなわち、「教師への適合」→「討議による知や技能の獲得」→「世界観や自己観の変革と関わる世代間コミュニケーション」というように授業の水準が構想されている(Meyer2009, S. 140)。そこでは教材の獲得のみ、あるいは子どもの活動のみではなくて、教材の世界についての「意味の討議」を通した、子どもたちによる「意味構成」が重視される。子どもが授業において構成している意味の体系については、例えば算数･数学においては、数学の意味、数学の授業の意味、学校での数学の学習の意味、数学の学習の意味、数学に取り組むことの意味が示されている（樋口 2016）。

しかし、ドイツの「陶冶履歴」研究は、基本的に中等教育段階の実践をふまえて構想されたものであり、初等教育におけるその理論の有用性はほとんど言及されていない。中等教育段階での意味構成を見通した場合、初等教育段階でどのような意味構成をさせる必要があるのか検討する必要がある。

上述の背景にもとづいて、以下のような意義があると考えられる。

・これまで日本の初等教育においてもその重要性が自覚されていたものの授業論のなかに明確に位置づけられてこなかった「意味」という概念を授業づくりの原理として位置づけること。

・ドイツにおいて主に中等教育での理解されてきた理論を初等教育の文脈で再解釈すること。

日本でも「陶冶履歴」研究は深澤広明氏や中野和光氏によって重要な教授学モデルとして紹介されているが、詳細な検討はされていない（深澤 2010、中野 2014）。理論的背景や特徴は申請者（樋口 2015、2016）が紹介しているが、実践の検討が文献を通してのものであることや、その理論にもとづいたモデルの開発といった日本の授業実践への援用が検討されていない。近年強調されるアクティブラーニングが構成主義的な学習観を前提するものであることをふまえると、構成主義的な学習観にたつ「意味構成」を原理とした授業モデルの提示は有益である。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、授業において教師と子どもたちとによる「意味の討議」を通した子どもの「意味構成」の内実を明らかにし、それがどのように質的に発展していくのかのモデルを開発することである。具体的には、子どもの発達段階に応じた授業の水準を提示する「陶冶履歴の教授学（Bildungsgangdidaktik）」の理論と実践を手がかりに、「意味の討議」の質的発展モデル案を作成し、そのモデル案の妥当性を授業実践から検証・改善することを目的としている。

## ３．研究の方法

研究の方法は以下の通りである。

（１）「陶冶履歴」研究における「意味構成」を重視した授業の理論と実践についての文献研究

（２）「陶冶履歴」研究にもとづく授業実践の実態調査（ドイツ調査研究）

（３）（１）および（２）にもとづく「意味構成」の質的発展モデル案の作成

（４）授業研究にもとづく意味の構成の質的発展のモデル案の妥当性の検証・改善

## ４．研究成果

研究の方法（１）～（４）に沿って、本研究の成果は以下の通り示す。

（1）「陶冶履歴」研究における「意味構成」を重視した授業の理論と実践

陶冶履歴研究にもとづく授業理論においては、授業が、図１のような三つの水準でとらえられている。

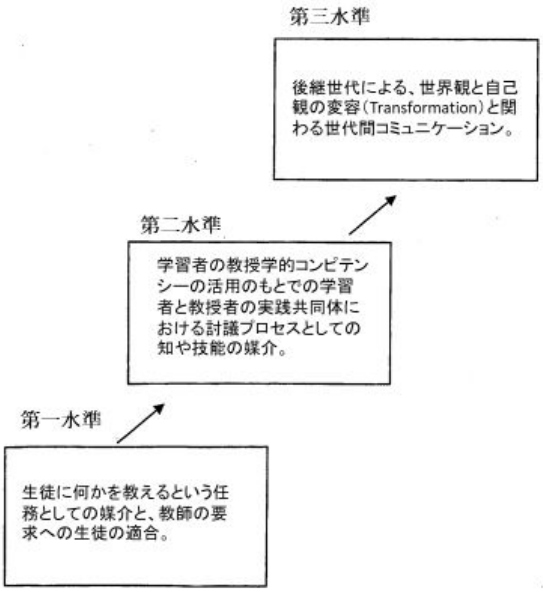


図 1：陶冶履歴の教授学における授業の水準（Meyer 2009、140）

この三つの水準に即した授業の特性は、それぞれ、第一水準：教科志向と再生産、第二水準：生徒志向と再組織／転移、第三水準：生徒、教材、問題解決を志向して教師の支配を取り外すこと、と描かれている。

マイヤーらは、２つの仮説を検討した。一つは、授業における子どもたちの自己決定、自己責任が大きくなればなるほど、子どもたちは授業に意欲的に参加する、ということ。もう一つは、それとは反対に、教科の要求や教師の提示する目標設定が子どもたちの未来の展望と結びつけられたときに、こどもたちはより容易に授業に参加する、ということ、である。この２つの仮説は実践を検討する際の視点として重要である。

（2）「陶冶履歴」研究にもとづく授業実践の実態調査（ドイツ調査研究）

「陶冶履歴研究」グループのシリーズ本をとりまとめている中心的な人物の一人であるトラウトマン（Matthias Trautmann）氏と 2019 年 3 月にズィーゲン大学において面談し、研究協議をおこなった。「意味構成」や「参加」という概念の研究上あるいは授業分析上での活用について、研究グループの起源や組織的な動向について確認した。

陶冶履歴研究グループにおいても、意味構成や参加という概念は、授業研究のための分析視点としてはそれほど活用されておらず、研究的な意味合いの強い概念である可能性が高いことが明らかとなった。また、研究グループのシリーズ本は、学術的ゼミ（Kolloqium）として年に数回実施されている会での研究成果であることが明らかとなった。一方で、この学術的ゼミのメンバーが陶冶履歴研究の考えのもと実践を展開しているので、どの程度直接的にこの概念に触れているのかということも含めてドイツの実践への参与観察は今後の課題としたい。

ここでは、ドイツの研究論文で紹介されている実践記録を踏まえて報告する。

先に挙げた仮説の一つ目に関して、マイヤーらは、実践記録にもとづいた考察では、生徒の参加と、教科に関する知や技能の解明とが相互作用的に高まることを指摘している。

その一方で、マイヤーらは、「第三水準を見つけられなかった」 とも述べている。社会や大人が要請するものへの適合という意識が生徒の側にも強く働いていて、そもそも子どもたちが自己決定を強くのぞまないケースも見られたという。

以上のことから、第一水準よりも第二水準、第二水準よりも第三水準の授業にあがっていく方が、子どもの参加が高まる傾向にあるとは言えるが、子どもが自身の自律性の領域を際限なく広げていった方が参加が高まるというわけでもない可能性もあると言える。こうした点は、今後の追究課題である。

（3）（1）および（2）にもとづく「意味構成」の質的発展モデル案の作成

以上のような理論と実践記録にもとづいて、授業の三つの水準に対応する、意味構成、参加、学びの深さに関わる発展イメージを図 2 のように示した。

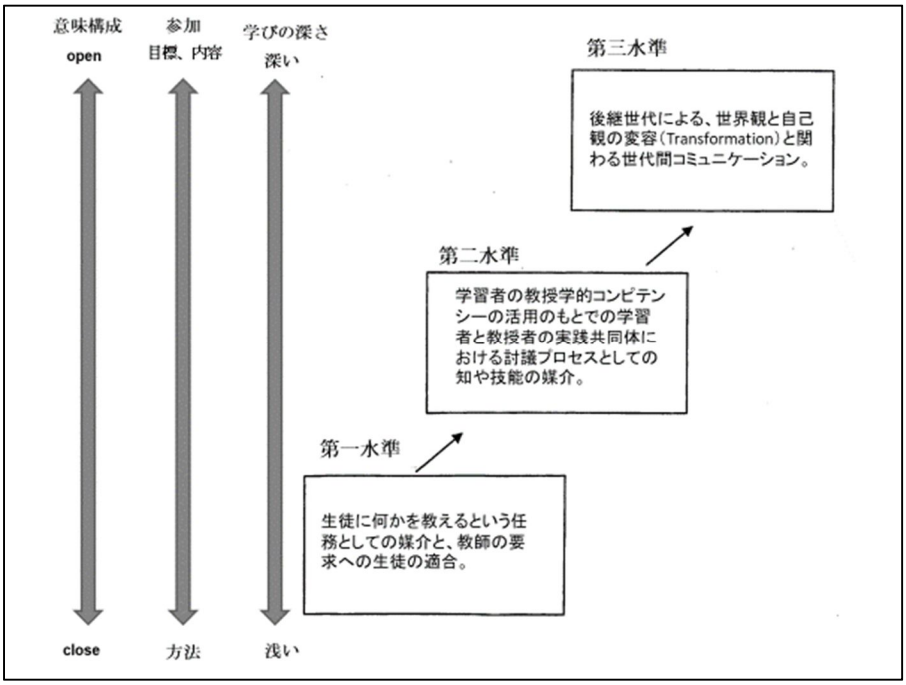


**図 2：授業の 3 つの水準と参加と意味構成**

このモデルの解説は、（４）において展開したい。

**（４）授業研究にもとづく意味の構成の質的発展のモデル案の妥当性の検証・改善**

ここでは、日本の中学校において参与観察した授業からの考察も含めて、図 2 の解説のような形で、成果を報告したい。

授業の方法への決定に関与するだけでなくて、授業における追究課題、すなわち目標や内容の部分の決定に関与・参加できたときほど、学習者の参加の程度は高まっているし、それは上の水準での授業ほど実現できる。その点で、下の水準では、子どもたちは教師の要求に適合するというような意味しか構成しえないが、上の水準での授業では、子どもたちの意味構成は多様に認められている。

さらに、中学校の授業研究においては、学びの深さとの関連についても明らかになった。

Ａ中学校の英語の授業では、活動に対する意味構成の異なる二人の生徒による学び合いが、作成するプレゼンテーション資料の充実につながっていった。Ｂ中学校の国語の授業では、自作の詩への批評コメント（「内容が 1 つにまとまっていない。詩かわからない。」を読んで、「自分が「詩」って言ったら「詩」や」という発言をした生徒と、コメントをした生徒を含めた教室全体との間で、「詩」とは何かという詩の意味が再構成されていった。このように、子どもが自分なりの意味をもって授業やそこでの活動にあたったときに、学びの深まり、すなわち意味や認識の再構成が起こっているのである。

＜引用文献＞

・安彦忠彦『「コンピテンシー・ベース」を超える授業づくり』図書文化、2014 年。
・久田敏彦監修、ドイツ教授学研究会編『PISA 後の教育をどうとらえるか』八千代出版、2013 年。
・深澤広明「「よい」授業の教授学」『現代教育科学』2010 年 6 月号、No. 645、2010 年。
・樋口裕介「社会的要求と子どもとをつなぐ授業に関する一考察― 「陶冶履歴の教授学（Bildungsgangdidaktik）の特質と構造―」『福岡教育大学紀要 第 4 分冊 教職科編』第 64 号、2015 年。
・樋口裕介「意味構成（ Sinnkonstruktion ） としての学習に関する一考察― 陶冶履歴研究（Bildungsgangforschung）を手がかりに」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第 61 巻、2016 年。
・Meyer, M. A.: Bildungsgangdidaktik zwischen Lehrgang und Lernerbiografie. In: Arnold, K.-H./ Blömeke, S./ Messner, R./ Schlömerkemper, J.(Hg.): Allgemeine Didaktik und Lehr- Lernforschung. Julius Klinkhardt Verlag, Bad Heilbrunn, 2009。
・中野和光「外国の教育方法学研究」日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社、2014 年。
・鈴木和夫『子どもとつくる対話の教育』山吹書店、2005 年。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>北川剛司、樋口裕介 | ４．巻<br>2 |
| ２．論文標題<br>学習集団研究からみた「カリキュラム・マネジメント」の課題 | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>学習集団研究の現在Vol.2 学習集団づくりが描く「学びの地図」 | ６．最初と最後の頁<br>22-38 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>樋口裕介 | ４．巻<br>65 |
| ２．論文標題<br>陶冶履歴研究（Bildungsgangforschung）における学習者の参加に関する考察 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>教育学研究紀要（CD-ROM版） | ６．最初と最後の頁<br>588-593 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>樋口裕介 |
| ２．発表標題<br>陶冶履歴研究（Bildungsgangforschung）における学習者の参加に関する考察 |
| ３．学会等名<br>中国四国教育学会第71回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|